

戦場心理 2007. 10. 16

私が自衛隊を退職してもう30年になる。この間に国内外の情勢も科学技術も大きく変化した。今の隊員諸君が何を考え何に悩んでいるか、想像はできても的確にわかっているという自信はない。そこで本校での講話ももう限界と思い昨年をもってご辞退するつもりであったが、実戦の体験に基づく話は是非続けてほしいという昨年の学生の所見をみて、少しでも役に立つならばと思い直して、今年もやってきた次第である。ところが脳科学者の茂木健一郎氏の説によれば「人間は自分に都合のよいことしか記憶しない。都合の悪いことは都合のよいように無意識に変えて記憶する」ということであるので、私が事実と思いこんでいることも、実は自分に都合のよいように無意識に変えているかもしれない、よく注意しながら聞いてほしい。

海上自衛隊が誕生してから50数年、この間日本は平和を謳歌し、国民はかつて経験したことのない経済的繁栄と豊かな生活を楽しんで今日に至った。その反面の精神的、道義的退廃は誠に憂うべきものがあるが、それはともかくとして、まずは幸せと言うべきであろう。その平和を維持できた要因の一つに、その効果の大小はともかく、自衛隊の厳然たる存在があったのは言うまでもなく、自衛隊は未然防止の任務を立派に果たしてきたのである。もっともその裏を返せば、真に厳しい試練を受ける機会がなかったというのもまた事実である。僅かに湾岸掃海が実戦に近い試練であって、落合部隊は立派に任務を果たしたのであるが、これも戦火が収まった後に初めて派遣されたものであった。もちろん掃海作業そのものの危険性は実戦と何ら変わることはないが、その環境は実戦の時とは大きく異なるのである。必ずしも適切な例ではないが、私が今日でも目に浮かぶような気がする実戦下の掃海隊の奮戦を紹介しておこう。

後ほど紹介するように、私の乗っていた駆逐艦の属していた部隊は、開戦当初フィリピンのビガンというところに上陸作戦を行ったが(p6)、当時進攻作戦には必ず掃海艇が配属され、輸送船の入泊前の航路や泊地の掃海はもちろん、対潜戦闘にも当たっていたのである。このときには6隻の掃海艇が配属され所定の掃海任務を終わった後、泊地の対潜警戒に当たっていたところ、その1隻が敵機の銃撃を受け、搭載していた爆雷が誘爆し目の前で轟沈した。これが戦争の厳しさをありありと突きつけられた最初であった。

次はタラカンの占領に当たり揚陸した陸軍から敵降伏の通報を受け、海軍の指揮官は、急がれていた製油施設の確保と復旧のため直ちに掃海部隊に内海水路の掃海を命じた。指揮官先頭で6隻の掃海艇が内海に入った途端、隠蔽した砲台から砲撃を受け、先頭の2隻は自艇の大砲で反撃しつつ敵に突っ込み、あれよあれよという間に沈没、残りの4隻は脱出した。外海から一部始終を見ていた我々は、ただ切歯扼腕するのみで、何の支援も救助もできなかった。その悔しさと、沈みながら最後まで大砲を撃っていた掃海艇の悲壮な戦闘の様子は、64年を超えた今でも昨日のここのように蘇る。

これは別に落合掃海隊にけちをつける気持ちは全くなく、有事にはどんなことが起こるかわからないという例に挙げたものである。

ところで私には今日有事とはどんな様相を指すのか、その有事において隊員特に幹部にはどんな役割を果たすよう期待されているのか、的確かつ具体的に示すことは困難である。私どもが体験した戦闘が繰り返されることはないにしても、「ことに臨んで危険を顧みず、身をもって責務の完遂に努めることが、自衛官の服務の本旨であり、このことは当時の軍人と少しも変わりはない以上、60年前の私

どもの経験もあながち諸君にとって無用ではないであろう。

そういうこともあってか最近水交会で「戦場心理」という本をまとめられた。これは各種職域の戦闘経験を要約して網羅したものであるが、広範なだけに個々の事象になるとその背景や状況が分からず、何故そういう気持ちになったか疑問を持つことも多いと思われる。戦場の経験を持つものは、自分の経験から類推してある程度想像がつかうが、そうでないとよく分からないということもあるかもしれない。

そこで今日は先ずP12-14にある私自身の経験の背景を中心に話し、時間があれば、その他のことについて、諸君の疑問に答えられる限り答えたいと思う。

私が海軍に入ったのは、しっかりした考えがあつてのことではなく、親しい友人の勧めるままに兵学校を受けた次第で、親戚や周囲に軍人は一人もおらず、海軍についても全く無知であつた。それから70年海軍に入ったことを一回も後悔せずにすんだことは誠に幸せというほかはない。

先ずショックを受けたのは入校してから1週間目頃ある指導官から「お前たちはいろいろの動機でやってきたろう。短剣をつつてよい格好をしたい、遠洋航海で外国に行きたい、中には大臣大将になりたいというのもあるだらう。そういったことは今すぐ全部忘れてしまえ、そして太平洋の藻くずとなると覚悟しろ」と訓示されたことである。えらいところに来たとは思つたが、毎日の生活に追われて、深く考えることもなかった。

支那事変が始まったのが次ぎの年である。63期が少尉に任官したばかりで、上海の危急に応援に馳せつけた艦艇から揚陸される陸戦隊の小隊長は皆、63期の方であつた。63期は我々と入れ替わりに卒業されたクラスで、われわれ自身は知らないが上級生はよく知っており、あの人が戦死したとかあの人が負傷したとかといった話はすぐ伝わり、人ごととは思えなくなった。卒業すれば配置が与えられ、部下を持つ。弾丸の飛んでくる中で自分は与えられた責任を果たし、部下の前で恥ずかしくない振る舞いができるであろうか、これが頭を離れない課題となった。

事変が一段落すると交代が行われ、兵学校にも前線の陸戦や艦艇、航空部隊から歴戦の勇士が教官として着任された。これらの方から参考館の講堂で全生徒が夜の自習時間に 戦闘の経験や教訓などを承った。内田一臣さんの名を初めて耳にしたのもその講話の一つである。今日でも印象深く覚えているその話とは、戦場でもっとも頼りになるのは、平素大言壮語する人ではなくて、黙々と自分の責任をしっかりと果たす人であるという趣旨で、その例として内田少尉の名が出た。彼は平素はおとなしく大きな声も出さないような人で、こんな人に戦争ができるのかと思つていたが、いざ戦闘になったら一番勇敢に任務を果たしたのは内田少尉であつたというのである。その内田さん自身の回想はP133-138にある。なお私が戦争中兵学校教官になったときは、井上成美校長の指示で生徒に戦争の話はするなと禁止されていた。生徒に落ち着いて勉強させようという考えは分かるにせよ、現に行われている戦争に日ならずして参加すべき生徒が興味と関心を持つのは当然であり、その心構えに参考になることは聞かすべきではないか、というのが、自分の経験からの私の考えであつた(もちろん敗戦後まで見通す洞察力は私にはなかつたが、戦時下の兵学校で海軍士官としての素養教育はもちろん必要であるが、当面の用にも供えるべきではないか、現に当時の在校生から卒業後多くの戦死者が出ている。というのが私の理由で、今日でもそう思っている)

話がそれだが、黙々と自分の責任を果たすことはできそうだが、しかし顧みて人よりあまり勇敢とも思えない自分が戦場でそれができるのか、というのが変わらない悩みであつた。P12の話はその頃のことである。ずっと後のことであるが、全く同じ話であるのでついでに紹介しておこう。駆逐艦「夕立」に乗って

いたある軍医官が戦後次のような回想を書いている。「私はある日艦長に自分の心境を述べご意見を聞いてみた。今この作戦を繰り返して、何回繰り返しても。急降下爆撃機に突っ込んでこられるとやはり怖いと思います。艦長は怖くありませんか、と。吉川艦長は答えた。それは俺だってやはり怖いよ、ただ俺には対空戦闘や操艦などすべての指揮で頭が一杯だから怖いことを忘れていられるだけだ。――」さて半信半疑で教官の話聞いて卒業した私は、やがて始まった戦争で教官の言われたとおりであったことを身を以て体験したのである。

私は駆逐艦「夕立」の水雷長として開戦を迎えた。その最初の作戦がビガンの上陸作戦で北村さんがP6に書いてられるとおりであるが、「夕立」が直接攻撃を受けることもなく、また対空戦闘での私の任務は応急指揮官で、被害を受けるまでは見張り協力であったので、格別のこともなかった。それから進攻作戦を重ね、対空戦闘も対潜戦闘も数多かったが、私が本当の初陣という気のしたのは、スラバヤ沖の海戦である。スラバヤに揚陸するため48隻の船団を護衛した我が護衛部隊およびその支援部隊に対し、敵も最後の段階として連合軍所在全水上兵力を以てこれを阻止しようとしたもので、敵は重巡2隻軽巡3隻駆逐艦9隻、我が方は重巡2隻軽巡2隻駆逐艦14隻、ほぼ同じ兵力であったが、航空優勢は圧倒的に我が方にあり、航空機から敵情がよく報告されていた。当時訓練してきた主力対主力の決戦の要領に準じ、先ず遠距離から93魚雷を発射して、その魚雷網に敵を誘致し、その成果を利用して近迫決戦するという方法がとられた。この戦闘を通じ、水雷長として自分のやるべき仕事、すなわち逐次所要の号令を下しつつ、敵情を観測し敵針敵速から射角を決定、魚雷を発射することに全身全霊を打ち込み、怖さを感じる余裕はなく、まさに教官から教えられたとおりであった。その他この戦闘を通じて得た教訓の一端を紹介しておこう。

先ず初陣では敵は自分に勝って見え、すべて不利に感じる、いわゆる七分三分のかねあいと言われていることが、まさにその通りであることを実感した。最初に会敵したとき私には敵に新戦艦現るという気がしたのである。それまでのすべて情報や、航空機の偵察から敵に戦艦があるはずはないのに、自分の眼鏡に見える敵の大艦が戦艦に見えたのであった。それはあとから「デ、ロイテル」というオランダの軽巡であることが判明したが、他の巡洋艦群より我が方に近く占位していたため大きく見えたのであった。もちろん事前に敵の艦型図は一生懸命勉強していたのにこの始末である。悪いことに前続艦の発射した魚雷が次々と爆発しその水柱が敵の大口徑砲の弾着のように思われた。(魚雷の着発信管の感度が鋭敏すぎて、安全距離を出たところで波浪の抵抗により発火したのであった。これも平時から実戦に近い状況でよく実験しておくべしという教訓である。)

また最初に遠距離から発射し、敵を誘致すべく味方の方に向かっていくとき我が船団が見えてきたときには、誘致行動であることは分かっているが身を捨てても船団を守らなければという悲壮な思いをしたことであつた。次の教訓は弾丸が飛んでくると、人の本性がはっきりと出るということである。我が船団が見えてまもなく、我が魚雷の一本が敵駆逐艦に命中し敵が混乱した、との航空機の情報によって全軍突撃が令され、水雷戦隊は反転して敵に向かった。通常水雷戦隊の突撃は、適当なところまで、旗艦が引っ張って近接し、やがて司令官の「各隊突撃」の令によって、駆逐隊毎に攻撃したのであつて、突撃時の魚雷の発射距離は夜戦で2000メートル、昼戦で5000メートルが標準であつた。訓練の時には目標と衝突するかと思うほど突っ込んでいたが、いざ実戦になるとそうはいかない。私の隊などは8000メートル以上で発射、標準距離まで突っ込んで発射したのは、戦死後2階級特進された佐藤康夫司令率いる第9駆逐隊の「朝雲」、「峰雲」の2隻だけであつた。いくら93魚雷が遠くまで走る

といっても、回避自在の敵に対し近接しなければ中たるものではない。この突撃で戦果を挙げたのが第9駆逐隊だけであったのは怪しむに足りない。「朝雲」が一時被弾航行不能と報じて心配したが、しばらくして自力で復旧して合同した。このとき、遠くで発射して反転する我が隊のそばを、駆け抜けて突っ込む9隊を見て、これが本当の駆逐隊だと思ったことも忘れられない。後から聞いた話では「各隊反転」と報告する艦長に対し司令は「艦長、後ろを見るな」と一喝したという。この戦闘で主力の第5戦隊「那智」「羽黒」は、2万メートル以上の遠戦に終始し、弾庫が空になるくらい撃ったが戦果は殆どなかった。アッツ島沖の海戦も同じで有利な態勢で会敵しながら遠戦に終始し敵を逸したのであった。

次に強く感じたのは平素訓練の重要性である。自慢話のようで心苦しいが、開戦前日本海軍の人事が急速に若返り、私は8年先輩の後を受け、高等科を終わった人がつく水雷長の配置を与えられた。私は高等科はおろか兵学校でも短縮教育のため、水雷長として必須の雷撃法とか発射法をろくに学んでいない。そこで着任後必死で勉強もし自分の訓練(昼夜の対勢観測や適時適切な指揮等)にも精を出した。幸い部下はみな艦隊勤務が長く、部下の教育訓練の心配はなかった。しかしみな初陣である。私の横に座っているベテランの方位盤射手もややあがったためであろうか、まだ発射始めの令のないのに眼鏡に敵を認めるや突然「用意」と叫んで、発射引き金を発射の位置に回した。私は咄嗟に「発射待て」と令して誤発を防ぐことができた。これも連日連夜発射指揮訓練をやってきたお陰と思う。

この後各種の作戦を経てやがてガダルカナル方面で戦闘することになった。艦長もミッドウエー作戦の前に交代されて、戦死後2階級特進された吉川潔艦長が着任されていた。ショートランドを基地にしてガダルカナルに突入すること18回、最後が第3次ソロモン海戦であった。ショートランドとガダルカナルの距離が300マイル、ガ島を基地とする敵小型機の行動範囲が150マイル、そこで日没後150マイルに入り、日出前に150マイルを出るのが最善であるが、現地での揚陸作業や敵の掃討に時間がかかり、たいていはどちらか1回、時には両方で空襲を受けるのが常であった。しかも最初の頃と違い今度はこちらが主目標である。その中で艦長の巧みな戦闘指揮と操艦によって、至近弾により艦橋後部で数名の負傷者が出ただけですんだ。

航空攻撃について一番の思い出は、17年10月の第2師団の攻撃に先き立ち、鼠輸送(駆逐艦による増援輸送)では不可能な大砲を含む重量物や糧食弾薬を一挙に運び込む輸送船6隻の増援輸送が計画され、その護衛を行ったときである。高速船団といっても、せいぜい14ノットに過ぎない、30ノットの駆逐艦と比べると往復の間敵の空襲を受ける時間は2倍以上、おまけに白昼敵の飛行場の前で揚陸作業を強行するわけである。船団も護衛部隊もまず全滅を覚悟せねばならない。敢えてこの作戦を強行する上級司令部の気迫と戦勢の急迫がひしひしと身に迫り、たとえ全滅しても、輸送物件だけは揚陸し、後は陸上砲台になっても最後まで戦うのみと覚悟を決めたことであった。このときの戦闘経過は当時の砲術長梶島大尉の日記があるのでそれを紹介しておこう、

「10月14日(前略)1330頃、来る、来る、敵機の大群。戦爆あわせて30数機、遙か水平線上に黒ごまを撒いたように見える。味方は観測機数機あるのみ、悠々として敵は我に向かう。我亦散開してこれを迎え撃たんとす。嵐の前の静けさ。敵は二手に分かれ、主として船団めがけて殺到。高々度より一機、また一機、飛燕の如く急降下をなす。一弾、また一弾。幸いなるかな命中弾なし。轟々閃々たる海空の死闘。防御砲火熾烈、弾幕空を覆う。

敵機は駆逐艦小癩なりとむかってくる。「五月雨」損傷あり。我全艦火を噴き、撃って撃って撃ちまく

る。敵は遂に目的を果たし得ず引き返す、船団損傷なし。よかった、よかった。奇跡的なり。

1600頃 敵機30余機再度来襲。暗暗黒黒たる雨雲より飛燕のごとく急降下、舞いおる。一閃、海水爆煙騰沖。あるいは天空より閃々たる火の雨降り注ぐと見るや敵機の機銃掃射、我が砲火に撃墜され、火の尾を長く曳いて墜落する敵機、護衛の駆逐艦は高速白波蹴立てて船団の周辺を縦横に馳駆。砲身、銃身も焼けんばかりに猛射を続け、弾幕空を覆い、曳光弾天にほとばしる。凄絶なる海空の死闘、その極に達す。

われまた雲中よりする敵機の急降下のため至近二弾を受け、傷者七あるも戦闘に支障なし。薙ぎ払い、叩き落として進む。

船団無事、このような幸運またとある。

六隻中二隻でも一隻でもたどり着けたらと思いに、二回にわたる大空襲を切り抜けて、今ガ島まで60マイル。月皎々と照る中を堂々と進撃、誰かこの成功を予想し得べきぞ、信じ得べきぞ。天の我にくみしたまえるなり。

天を仰いで感胸にみつ。2200船団入泊揚陸開始、————不眠警戒を続く。明日こそは敵飛行場膝元、急霰のごとき敵の爆弾機銃弾のお見舞いならむ。われ血達磨になってもやりぬくぞ。(中略)

0412敵基地で飛行機の試運転が聞こえる。荷役を急ぐ輸送船団を囲んで駆逐艦8隻・————敵機の空襲に本日の激闘の幕は切って落とされた。始め数機の奇襲攻撃は変じて十数機の編隊協同攻撃となり、殷々たる砲銃声、天に沖する一大水柱、爆煙、たちまちにして修羅の巷と化す、幸いなるかな。幸いなるかな。船団に命中弾なく、敵飛行場の足下、猛烈なる空襲下、着々として揚陸作業は進む。————

急襲のごとき機銃弾は飛んでくる。相次いでこれでもかこれでもかと、敵爆撃機はマストすれすれに急降下爆撃をなす。神の助けぞ一発も命中せず。

————艦橋の上なる射撃指揮所の天蓋に、どっかりとあぐらをかいて敵機撃墜に任じつつ男の限りなき喜びを感じず。

昼間始めてみるガ島、十数回突入したりしがその山容、海岸を見はるかすのは初めて、————空はあくまで澄み渡り、味方戦闘機が上空高く警戒をしている。味方戦闘機の不在をねらって敵機は来る。————秒一秒、分一分と時間のたつのがまどろかしい。時計を見るとまだ午前五時半だ。連続間断なき敵襲、われ碧波を蹴って馳駆しつつこれを撃退。————指揮所天蓋にあぐらをかいたまま戦闘配食の握り飯をほおぼる。————0940ごろB-17七機編隊高々度、我が砲撃を尻目に敵ながら堂々の陣を以て来襲、先に急降下爆撃のため燃え続けている笹子丸の隣の吾妻山丸は爆煙に覆われ、火炎天に沖す。とうとうやりやがった。他の4隻荷役を中止して急速出港、爆撃を避く。再び入泊、作業にかからんとしたところを、急降下爆撃機、目にもとまらぬ早さで襲いかかり、一瞬九州丸に命中、三隻枕を並べて一団の火のかたまりと化す。荷役は八割り終わったりというも、残念なことだ。全滅を懸念さるをもって1200頃一時避退を下令され、西航。1500, 反転泊地に向かはんとせしに、敵十数機襲いかかりたり、日ようやく西に没せんとし、壮絶なる海空の死闘、陸軍船舶団長から「月明あり来るな」との電あり、遂に作戦を中止しショートランドに向かう

以上が樫島大尉の日記である。当時の心情の一端を分かっていたくため紹介した。

さて、最後は第3次ソロモン海戦の話になるが、その前に吉川艦長の人柄を紹介しておこう、私は吉川艦長に仕え、戦闘指揮官はかくあるべきものということをも身をもって学んだことは、一生の幸せと有り

難く思っている。艦長が戦闘に当たりもつとも勇敢であったことは言うまでもない。しかもそれだけではなかった。常に冷静沈着に戦機を看破し、たとえ身を犠牲にしても大局から見て友軍全体の作戦に寄与するよういつも配慮されていた。これから話す第3次ソロモン海戦はその好例である。

艦長の任務に対する心構えは真剣かつ深刻であった。少ない兵力で無理な作戦も強行せざるを得ない上級司令部の立場とその意図を良く理解し、全力を尽くして任務を完遂し、その期待に添うだけでなく、それ以上の寄与を行われた。当時私ども生意気盛りの若い連中は、上級司令部や友軍に対する不満を公言したが、艦長が一言でも批判がましいことを口にされるのは聞いたことがない。大言壮語も全くなく自分の功を誇られることもなかった、肩肘張らず淡々としてやるべきことをやるといった感じであった。

艦長は訓練には厳しかった。とくに自らの訓練は一日も怠られなかった。戦闘に際して闇夜の中敵情を判断し、艦の運動を掌りつつ流れるように口をついて出る的確な戦闘指揮は、まさに毎日の自己訓練の賜物ではなかったろうか。

任務と訓練には厳しい艦長も寛ぐときには本当に良いオヤジであった。明るくて率直、かみしもを着ることのない人柄は、傍におるだけでも自ずから心が和み、笑いが湧いた。この艦長と一緒にいれば地獄の果てまでもと思ったのは、私一人ではなくおそらく全乗員の気持ちであったろう。

さて第3次ソロモン海戦であるが、これは船団輸送の前に敵航空機の活動を制圧するため、「比叡」「霧島」を以て敵飛行場を砲撃しようとする我が軍に対しこれを阻止しようとする敵との間で行われた戦闘で、詳しいことは省略するが、「夕立」は主隊の警戒のため右前方に占位し、約6キロで敵巡洋艦、駆逐艦7隻以上を発見、全軍に警報するとともに、敵の前程を横切って敵艦列の右から、「比叡」の照射砲撃に策応し単艦で魚雷攻撃を行った。

P13の前半にあるのはそのときの状況である。

ここには省略してあるが、航行不能になった後の状況を少し話しておこう。

深夜もう翌日になっていた。「夕立」は単独で敵中に取り残されていた。先ほどの修羅の巷が嘘のように静まりかえった中で、敵艦数隻が同じように火災を起こし動けずいた。「夕立」の傍を2隻の味方の艦が通っていった。1隻は巡洋艦「長良」、「我「夕立」航行不能」と報じたが、何も言わずにそのまま遠ざかっていった。(後で分かったことはこの「長良」が状況を第2駆逐隊に通報し、「村雨」「五月雨」が救助のために引き返してくれたのである。「夕立」の通信装置は被害のため視覚通信のみ可能であった)もう1隻は当時の水戦司令官がのっていた「朝雲」で、同じ報告に対し「カッター1隻送るにつき乗員は機宜陸上に避難せよ」と指示して、「朝雲」のカッターを残して去っていった。(「夕立」の短艇は戦闘で撃破されていた)

「夕立」では艦長始め乗員一同、艦を見捨てる気持ちは毛頭なく、せっかく残してくれカッターに乗員若干を乗せて、前甲板塗り具庫の火災の消火に海上から協力させた、乗員は、火災の消火、機関の復旧。さらには艦橋やマストその他張れるところに帆布やハンモックを張り巡らせ帆走をはかった。(当時の風向潮流によりガ島北岸に漂着可能と考え海岸砲台となることを期した)しかし火災はなかなか鎮火せず火勢はむしろ強くなり、一番砲の火薬庫は人力注水、機関復旧は不可能と報告され、明るくなれば残った3門の砲側照準で戦うほかはないと覚悟した。このとき私が何を考えていたか、今となっては思い出せないが、応急指揮官として、火災鎮火に懸命であって、余念はなかったのではないか。やがて僚艦「五月雨」が救援に来てくれた。吉川艦長の曳航してくれないかの要請も空しく、結局横付

けて乗員を収容した後処分のために魚雷1本を撃って避退した。すでに黎明に近く、まもなく敵の空襲が始まった。P13にあるのはこのときの気持ちである、「五月雨」はショートランドに引き上げたが、私どもを移乗させる暇もなく続いて「霧島」を護衛する部隊と合同、またガ島に砲撃のため突っ込むことになった。待ちかまえていた敵との戦闘が第3次ソロモン海戦14日の夜戦で。このときの感じがP. 13の最後に書いてあるとおりである。

以上要するに私の言いたいのは、任務を持ってこれに集中しているときには、怖いなどという感情が入り込む隙間が無いこと、そして戦闘で頼りになるのは平素の訓練で鍛え上げた自分と部下の練度だけである、ということである。したがって平時が続いている中でも、与えられた任務は身を挺しても完遂するという隊風を確立し、自分自身を含め訓練に真剣に取り組みどこにも負けない自信を培うよう努力を続けるならば 何が起こっても決して不覚をとることなく、国民の負託に応えうることと確信する。

参考 さてその教官の中に勇名をはせたパイロットが居られた。私はある休日その教官の官舎を訪問していろいろお話をうかがったとき「随分危険なめにあっておられますが、怖くはありませんでしたか」と質問した。教官は「それは怖いよ、しかし私にはやるべきことが多すぎて、とても怖がっている暇はなかったよ」と答えられた。私はよくわからないながら、内田少尉の話と合わせて、それまで悩んでいた問題に一筋の光が差したような気のしたことであった。そして自分が実際に実戦に臨んで教官のいわれたとおりであることを体験したのである。

開戦時私は駆逐艦「夕立」の水雷長であった。開戦当初から対空戦闘や対潜戦闘は数え切れないほど続いたが、初めての水上戦闘は、スラバヤ沖の海戦で、これがいわば私の初陣ともいえよう。ジャワ島攻略の陸軍第48師団を護衛したわが部隊と、これを邀撃した英、米、蘭連合部隊の戦闘であったが、今日も私が印象深く覚えていることは、まず敵が大きく見えたことである。最初会敵したとき、私は敵に新戦艦現るとびっくりした。一般情報からも、航空偵察からも、敵に戦艦のいないことはよくわかっていたのに、ややわが方に近く占位したオランダ巡洋艦の「デロイテル」がまるで大きな戦艦のように思えたのである。戦闘が始まって「夕立」の属していた四水戦はまず1万5千メートルぐらいから公算発射を行った。当時訓練していた艦隊戦闘で、主力の砲戦に先立ち93魚雷の長い能力を利用して（以下、資料なし。）